

第3章 アフガニスタンにおける女性の概況¹

3-1 女性の歴史

アフガニスタンにおける女性へのさまざまな弾圧は、タリバン崩壊によって外部世界に知られるところとなった。しかし、アフガニスタンの女性の歴史は、必ずしも抑圧の連続ではなく、女性たちの自由と平等が進んだ時代もあった。すでに10世紀には女性の権利を主張して投獄されたMahastyという女性がいたし、Rabi' a Balkhiという女性詩人が活躍していたが、トルコ人の奴隷と恋に落ち自身の兄弟によって殺害されたという伝説が残っている。15世紀にはヘラートのGowhar Shad王女が15年間君臨し、女性のための大学や法律を作った。1878年の第二次英国アフガン戦争時には、マラライという勇敢なパシュトゥン女性が現れ、ジャンヌダルクのように英国軍を追い払ったという史実もある。マラライは、現在でもアフガニスタン女性の尊敬の的になっている。1920年代にはソロヤ女王が女性の教育を重視し、王室の女性がベールを脱いで公共の場に現れた。1924年には初めての女性と子どものための病院もできた。

ザヒル・シャーの時代(1933~73年)には、女性差別をなくすことが奨励され、顔を隠すヴェールを自発的に取り除くことも許可された。特に、1950~60年代は、カブールを中心として女性が著しい社会進出を果たした。1953年にはダウド首相が就任し、女性が政府機関や社会で働くことが奨励された。1957年には、女性代表団がセイロンで開催された女性会議に参加し、翌年には国連会議に出席した。女性歌手やアナウンサーによるラジオ放送も開始され、1959年には、カブール大学に女性が始めて入学した。海外留学する女性も増加したが、1968年に政府により、女性の海外留学が制限されようとしたときには、何百人もの女性が集まってデモ行進をした。女性は、アリアナ航空の乗務員や電話交換手としても採用された。女性のための学校や医療施設も作られ、女性は看護技術だけでなく、管理部門についての訓練も受けることができた。ブティックや美容院を開いたり、研究者や教師、家庭裁判所の裁判官として活躍する女性もいた。女性たちは、政府各省および政府機関のあらゆる部門(警察、軍隊)、産業界などに進出した。カブールは、あらゆる種類のレストランやジャズクラブのある大都会であった。女性たちはベールをとり、ミニスカートをはいたり、口紅をつけたりと西欧化していった。1977年には、女性の権利のために闘うMeena Keshwar Kamalによりアフガニスタン女性革命組織(RAWA)というNGOが発足し、市民運動の萌芽が見られるようになった。しかし、このような女性の変化は都市の一部に限られており、農村地域の女性にどの程度の影響があったかは不明である。また、実際には根強い家父長制度に縛られ、結婚や職業を独自に決定することは困難だったと推定される。

政治的緊張が高まり、1978年に急進派によるクーデターが勃発し、ソ連軍の侵攻が始まると、大勢の人々が難民となって出国し、女性の生活は急変した。家から出てヴェールを脱ぎ、ソ連に対抗してムジャヒディンと一緒に戦ったり(そのような女性はムジャヘッドと呼ばれた)、ムジャヒディンの後方支援をする女性も多くいた。1980年には女子高校生が反政府運動を起こし、カブール市内でデモ行進をしたため虐殺された。当時、クンドゥズ地方で校長をしていたタジワール・カカールは、反政府運動を先導していたためにタジワール・スルタ

¹ 主に以下の文献を参考にして作成した。

- Skaine, Rosemarie (2002). *The Women of Afghanistan under the Taliban*, McFarland and Company, North Carolina.
- Ellis, Deborah(2000). *The Women of the Afghan War*, Praeger Publishers, Westport, USA.
- Dupree, Nancy Hatch (1998). *The Women of Afghanistan*. (和訳版)
- 内閣府アフガニスタンの女性支援に関する懇談会編 (2003)『アフガニスタンの女性支援策について』
- 前田耕作、山根聡 (2002)『アフガニスタン史』河出書房新社。

ンと呼ばれていたが、ムジャヒディンに武器を送り、都市で地下活動をしていた反政府グループを支援した。カカールは、その後カブールで投獄され拷問を受け、暗殺を避けるために海外に逃れた。多くの女性は実際に武器を取って戦っていた。一方で、ソ連の共産主義政権を支持する女性もおり、ソ連人と結婚したアフガニスタン女性も多かった。このように女性も敵味方に分断され戦った。

また、あまり知られていないが、当時ソ連軍にはソ連各地から集められた女性の軍事関係者や医療スタッフ、慰安婦などもおり、アフガニスタンの厳しい自然環境や戦況下でさまざまな物理的・精神的困難に遭遇し、殺害されたりした。アフガニスタン男性と結婚したソ連人の女性も多数いた。しかし、彼女たちの果たした役割や悲劇について、記録されたものはほとんど残っていない。

1992年にソ連が撤退すると内部抗争が激化した。そのようななかでタリバンが結成され急激に拡大して1994年末までには南部各地を制圧し、ついに1996年にはカブールを制圧した。タリバンは、女性の教育や雇用を禁止し、ブルカなしでの女性の移動を制限し、人身売買や投獄などをおこない、女性に対する弾圧を強化した。このような弾圧は、2001年米英軍による攻撃でタリバンが撤退するまで続いた。

2001年12月のボン合意でカルザイ氏が議長に選ばれ、アフガニスタン暫定政権が発足し、そのなかで女性課題省が設置されたことは、アフガニスタンの女性の歴史にとって画期的なことである。それ以前には、NGOであるアフガニスタン女性組織が、全国に支部を作って女性の職業訓練や識字教育をしていたが、タリバンにより組織は解体されてしまった。初代の女性課題省大臣に任命されたシマ・サマールが、女性たちから最初に期待されたことは、かつて女性組織が建設し使用していた建物を社会福祉省から取り戻し、そこに新たに女性課題省を設立し、女性に雇用や教育の機会を提供することだった。2002年6月には、緊急ロヤ・ジルガが開かれ、全国各地から200名の女性が参加した。アフガニスタン移行政権が発足し、カルザイ議長は大統領に就任し、ハビバ・ソラビが女性課題省大臣に新たに任命された。シマ・サマールは人権委員会の委員に任命された。その後、現在までの女性課題省の機能や役割は、次章に詳しく記載されている。(さらに、表1.アフガニスタンの女性の歴史を参照)

3-2 女性の権利と法律²

アフガニスタンでは、アマヌッラ国王(在位1919~29)の時代に近代化が始まり、女性への高等教育や社会進出も奨励されるようになった。王室の女性がヴェールなしで、公共の場に現れることもあった。1923年には、最初の憲法が制定された。このなかで、全ての人々の教育への権利が保障され、男女ともに奴隷を所有することが禁止された。

ナディール・シャー(在位1929~33)は、英国やドイツに接近し、1931年に制定した憲法では、男女の奴隷を禁止し、アフガニスタンのすべての人々に平等の権利と公共のサービスを保障した。しかし、実際には女性は通学を禁止され、ブルカを着用することが強要された。

ナディール・シャーが暗殺された後、王位に就いたザヒル・シャー(在位1933~73)のもとで制定された1964年憲法は、王制を擁立するものではあったが、全ての人に対して法の下での平等、教育を受ける権利、働く権利、投票する権利を保障した(25条)。表現の自由が保障され新聞の発行が許可され(1951年)、女性が最も社会進出した時代であった。

1978年の4月革命(Saur Revolution)後、アフガニスタン民主共和国が成立した。同年10月には、婚資(bride price)の改正が表明されたが、イスラム原理派からは抵抗を受け

² 出典: The Constitutions of Afghanistan(1923~1996), published by Shah M. Book Co., Kabul.

た。ソ連の影響の強い、カルマル政権下で制定されたアフガニスタン暫定政権の1980年憲法では、初めて「性別に関わりなく (irrespective of sex)、全てのアフガニスタンの市民は平等の権利と義務を有する」(28条)ことが明記された。革命政権を成功に導くための女性組織の樹立も認められた。1987年、ナジブラ政権下で制定された憲法では、「アフガニスタンの市民、男性と女性の双方は法の下での平等な権利と義務を有する」ことが謳われた。この憲法は多民族国家も承認しており(13条)、母子保健の重要性も謳っている(5条)。

1992年、ナジブラが失脚し、ムジャヒディン政権が樹立され、アフガニスタン・イスラム国家(92~96年)が成立すると、科学や技術の進歩に基づくイスラム近代国家を目指した1992年憲法の草案が策定され、翌1993年にはラバニが大統領に就任した。この憲法草案では、「アフガニスタン・イスラム国家は、男性と女性全ての人々の基本的小よび自然権を保障する。。。。。家族は社会の基礎単位であり、女性は、母として、信仰心の厚い人々を育成する建設的で重要な役割がある。女性の意欲や苦痛が実際の生活の経験を左右する。したがって聖なるイスラムの教義により、社会は女性の権利、特権、高く尊い地位を尊重しなければならない」(前文)と謳った。

このようにアフガニスタンでこれまで制定されてきた憲法では、徐々にではあるが、女性の権利の拡張への変化を見ることができるといえる。無論、これらの法律上の規定が、実際の生活や慣習の変革に確実に反映されるようになるためには、法識字の普及の努力やさまざまな社会的制度や慣行の変革が必要である。アフガニスタンには憲法や刑法、民法などの成文法よりも拘束力を持つ慣習法や、パシュトゥンの民族法であるパシュトゥンワリなどもあり、どのような条件下でどのような法律が優先的に効力を持つのか判断できない複雑な状況である。

2003年12月に憲法ロヤ・ジルガにおいて制定されることになっている新憲法において、女性の政治・社会参加へのさらに踏み込んだ権利を保障するような内容になることが期待されており、さらにその憲法に基づいて民法や刑法が改正されていくことが望まれる。また、2004年半ばには総選挙が行われ現行の移行政権が改編される予定であるが、女性が公平に選挙に参加できるように支援することが極めて重要になってくると思われる。

3-3 女性の社会・経済状況

アフガニスタンでは、80%以上の人々は農村部に住み、農業あるいは遊牧によって生活している。アフガニスタン女性の状況は、都市部か農村部かという居住地域、経済的状況、民族、年齢、難民や国内避難民など、置かれている環境によって大きく異なっている。

カブール市は、1776年に正式にアフガニスタンの首都となったが、かつて人々は、民族や血縁関係などに基づいて形成された地区に分かれて住み、その中では社会的結束が強かった。街に住んでいる女性たちは、塙に囲まれた敷地内で生活していたが、女性の公衆浴場や女性パークなどもあり、親族などが集まるコミュニケーションの場や機会があった。女性の社会進出が進んだ1950年代、カブールの富裕層の若い女性たちの多くは、移動の自由、教育を受ける権利を謳歌した。1970年代には、教師の74%、医師の40%、政府職員の30%が女性であったという記録もある。しかし、その後23年間に及ぶ内戦で女性の状況は悪化の一途をたどった。

国連資料によると、アフガニスタンの人口は、2,247万人(WHO 2002)、1991-2001年の年平均人口増加率は4.5%であり、出生率(47.85%/千人:WFP)も極めて高い。しかし、5歳未満乳幼児死亡率(1000人当たり170人:UNICEF)、妊産婦死亡率(10万人当たり1600人::UNICEF)も極めて高い結果、出生時平均寿命は、男性41.1歳、女性43.7歳(WHO)となっている。また、15歳以上の成人の非識字率は、女性78.1%(男性48.1%)であり、読み書きができる女性は約10人に2人しかいない。生涯にわたる「学習権」が確保されていない状態

にある。

世界で2番目に高い妊産婦死亡率の原因として考えられるのは、基本的な医療へのアクセスが限られているため、ほとんどの出産が家族や知り合いの介添えを受けて家庭で行われたり、女性の保健婦が非常に少ないということや、男性と一緒にでなければ女性が病院に行くことができない、基本的に女性患者は女性の医師・看護婦にしか診てもらえないといった慣習によるところが大きい。

感染症についても、結核患者の発生数は年間 約 70,000 件に上り、そのうち 23,000 人が死亡している。一般的に結核は男性の方が罹患率が高いが、アフガニスタンでは女性の患者が約 7 割を占めており、その原因としては劣悪な健康・栄養状態や非衛生的な生活環境などが考えられる。女性が安心して受けることのできる保健医療サービスの充実を図り、公衆衛生の基礎知識を普及し、高い妊産婦死亡率や結核の罹患率を下げるのが課題となっている。また、安全な水の供給や下水処理の改善も必要である。

都市部より農村部の生活状況のほうが厳しい面も多いが、地方では女性はむしろ行動の自由が大きいという報告もある。地方の村々の規模は小さく、特定の民族や親族で構成されており、大家族で住んでいるため、女性たちはカブールや他の都市に住む女性よりずっと自由に村の中を移動している。外部から隔離されているため、女性たちは一定の範囲内の農村では安全であると感じている。女性同士のコミュニケーションやネットワークがあり、相互扶助の仕組みが存在する。このような状況は、短期の調査や滞在では詳細を確認することは困難であるが、どのような社会においても人間の意思疎通の仕組みは存在すると思われるので、一見隔離されているように見える社会においても、そのような女性同士のネットワークが発達していることは容易に想像できる。このような既存の女性のネットワークや組織を活用して生活の質の向上を図っていくことが重要である。

女性の社会・経済状況に関しては、都市部・農村部双方に関して労働や人口、健康、教育、社会進出などの基本的な統計データが整備されていないため今後さらに詳細な調査が必要であると考えられる。

表1 アフガニスタンの女性の歴史

● 1950年以前	○ 主な出来事
10世紀：Mahasty が女性の社会進出を唱えて2回投獄される	
1400：ヘラートにGowhar Shat 女王、女性のための法律、大学、詩人への支援	1832-42：第1次英国・アフガン戦争 1878：第2次英国・アフガン戦争
1880：第二回英アフガン戦争でマラライが活躍	1919：第3次英国・アフガン戦争 アフガニスタンの独立が国際的に承認される。
1919-29：Saroya 女王がヴェールを着用せずに公共の場に現れる、女性への教育重視	1921：ロシアと友好条約を締結 1923：憲法制定 1933：ムハンマド・ザヒル・シャーが王位に就く（～1973）

<p>● <u>女性が活躍した 1950-60 年代</u></p> <p>1953 : ダウド首相のもとで女性の社会進出</p> <p>1957 : セイロンのアジア女性会議に参加、アフガンラジオで女性アナウンサー、歌手、詩人</p> <p>1959 : カブール大学に女性が入学</p> <p>1964 : 憲法で全ての人に尊厳、教育、労働の自由を保障</p> <p>1968 : 女性は海外留学を禁止され、女性が反対デモ行進をする</p>	<p>1953 : ムハンマド・ダウド・カーンが首相に就任</p> <p>1964 : 王政憲法の制定</p>
<p>● <u>ソ連侵攻の 1970 後半~80 年代</u></p> <p>1977 : 憲法第 27 条で男女平等を保障、RAWA が設立される</p> <p>1978 : 内戦の始まり</p> <p>1979 : ソ連の侵攻により女性の労働と教育は保障されたが、一方で多くの女性がムジャヒディン（反ソ・イスラム勢力）と一緒に戦った。</p> <p>1992 : ヴェールの着用を強要、メイクアップの禁止</p>	<p>1977 : 共和国憲法制定</p> <p>1978 : アフガニスタン・マルクス主義党 (PDPA) ムハンマド・タラキーが革命政権により実権を掌握、1977 年憲法を廃止</p> <p>1979 : ソ連軍、アフガニスタンに侵攻、以降、ムジャヒディーンとの間で戦闘が激化</p> <p>1992 : ソ連の撤退、軍閥同士の戦いの激化。</p>
<p>● <u>タリバンによる弾圧の 1990 年代</u></p> <p>1992 以降 : 女性の人身売買、投獄、暗殺が続く</p> <p>1997 : パーミヤンで女性大学設置</p> <p>1998 : 女性の教育・雇用の禁止、ブルカなしでの移動の禁止。</p>	<p>1996 : タリバンのカブール制圧</p> <p>1997 : タリバン「アフガニスタン・イスラム首長国」樹立を宣言</p> <p>1998 : タリバン、マザリシャリフを奪取、北部同盟ハザラ民間人 2000 人を虐殺、</p>
<p>● <u>平和構築の時代</u></p> <p>2001. 12 : 女性課題省の発足、シマ・サマール大臣の就任</p> <p>2002. 1 : Back to School Campaign</p> <p>2002. 3 : UNIFEM 女性コンサルテーション会議、カブール大学に女学生</p> <p>2002. 6 : 緊急ロヤ・ジルガ、アフガニスタン移行政権発足、女性課題省にハビバ・ソラビ大臣就任</p> <p>2004. 1. 4 : 憲法制定</p> <p>2004. 8 : 総選挙予定</p>	<p>2001. 9. 1 : 米国で同時多発テロ事件</p> <p>2001. 10. 8 : 米国、空爆を開始</p> <p>2001. 12. 22 : ボン合意、アフガニスタン暫定行政機構の発足</p> <p>2002. 1. 21-22 : アフガン復興支援国会議（東京）</p>